

看護職部門

入選

マー君の優しさ

【広島県】野瀬 淳子 のせ じゅんこ
65歳

「僕の血管は深いんだって、ここから奥に向かっただけでまっすぐに刺したら良いよ」と小児病棟の看護師になつて数カ月の私にマー君が教えてくれました。マー君が指さした位置からわずかに触れた血管をめがけて針先を進め、見事血管に入り血液が逆流してきました。ドキドキしていた私に「入って良かったね」とほめてくれました。「マー君のおかげよ。ありがとうね」。無事に採血ができたことの安堵感（あんど）でいっぱいでした。

痛くて私が失敗すると採血を繰り返されることになるのに、優しい言葉を掛けてくれる子どもでした。痛くて泣きたいのに我慢している子どもの表情に「失敗は許されない」

と強く思いました。

マー君は、急性骨髄性白血病の5歳の男の子でした。ステロイドを内服中でぶつくりして、採血当番の私はマー君の腕を駆血帯（くけんたい）で結んで、視覚では見えない血管を必死な顔で捜していました。そんな新米看護師を見て「マー君の血管は深いね」と話す先輩看護師の言葉を聞き、注射針を刺す位置を見ていて教えてくれたのです。

トラック運転手の父、明るい母、「こんな病気になるって変わるものなら変わつてやりたい」が口癖の元気なおばあちゃんが交代で付き添っていました。新人看護師の役割は「院内散歩」かくれんぼ「トランプ」と子どもらしいこと、楽しいこ

とを一緒にすることです。明るく優しいマー君は病棟の人気者でした。紙飛行機を飛ばし、婦長さんから叱られたこともあります。

厳しい化学療法に耐え寛解を迎え、いったん退院しましたが再発して入院してきました。水痘（すいとう）に罹患し、治療を尽くしましたが、ある日、家族に見守られながら天国に旅立ちました。おばあちゃんは「変わつてやれなかった」と泣き崩れ、主治医は「天使になつて飛んでいけ」とカルテに書き、私は「マー君のこととは忘れられない」と決心しました。

46年間の看護師生活で「忘れたい」と誓った患者さんからの優しさを、今、大切にしています。